

九、詩話

何人か文学者が一つの部屋で詩を論じた。

甲は言った。“そもそも詩とは両間の正気であって、ただ忠臣孝子だけが作れる。だから忠君孝親の作だけが詩であって、そのほかは全て詩ではない。ただ殉難割股の人だけが詩人であって、そのほかは全て詩人ではない。民主主義によれば、これがこそが‘春秋の大義’と呼ぶものである。”

乙が言った。“我輩はたとえ殉難割股できなくとも、忠君孝親の詩でなければならぬ、でなければそれが詩であるということにならないからである。だからわれわれは関聖帝君・岳武穆・郭巨・丁蘭の作を多く読み、簡練揣摩してそれを模倣しなければならぬ。”

丙が言った。“杜工部の詩を作ることができれば、それで十分だ。わたしは一生にただ杜詩しか作らず、人には杜詩を作るよう教えるが、杜詩の良さはどこにあるかなど探求するには及ばない。”

丁は言った。“江西派も良い、わたしはもっぱら江西派の詩を作る。詩は、古藤や奇石のように、生硬乾燥に作らねばならぬ。”

戊は言った。“外国の詩も大いに参考になる。して外国の文は大ブリティンを正統とする。ミルトン・ポープ・コールリッジ・ブラウニングは、いずれも大詩人であるから、読まないではいけない。このほかは大抵あまり有名な詩人ではないから、構わないでもよい。”

己は言った。“外国には白話詩があるが、特に文言の詩が多い。イギリスの五抑揚詩は、最高の五古であり、七抑揚は七古である。タゴールなど何人かの他は、大詩人はいずれも皆上等の文言詩を作り、格律が極めて厳格である。要するに十八世紀以前の詩はみなよい。輓近のは良いも悪いもいささか一緒くたである。詩は要するに文言を正統とする。白話詩や、散文詩もあるけれども。文言を訳すには必ず文言を用いるべし、——”

ここまで言うと、突然止まった。彼が頭をあげると、そこに坐っているのは戊一人で、そのほかはすでにいなかったからである。もともと彼が七抑揚を述べた時には、あの生硬な詩を作る詩人でさえすでに袖を払って立ち上がり、（彼は巖又陵先生の門生であつたけれども）自分の綿入れの幌をした人力車に乗って走り去つたのであつた。

※初出：1922年9月7日『晨报副刊』